

全国高専英語プレゼンテーションコンテスト

—英語が使える高専生の育成に向けて

大分工業高等専門学校 准教授 穴井 孝義

地区別英語弁論大会の限界

昭和三十七年の高専制度の発足以来、多くの高専卒業生が実践的な専門技術を持つ人材として日本の産業界に多大な貢献を果たしてきた。しかし、その一方で、産業界からは高専卒業生の英語力、とりわけ英語表現力の弱さが常に指摘されてきたことも事実である。この弱点を克服するために、一部の地区（関東信越・中国・四国・九州）では年に一度「暗唱の部」と「弁論の部」から成る「英語弁論大会」（地区大会）を開催し、高専生の英語表現力の向上に対する学習動機付けを図ってきた。

しかし、回を重ねるごとに、この種の地区大会には「二つの限界」があることが指摘され始めた。

一つは、より高い目標としての「全国大会」が存在しないことである。英語弁論大会はその地区内だけの大会であるため、入賞者に対する学内外の評価や入賞者自身の「誇り」も

今一つ満足度に欠けるものであった。また、上記四地区以外では地区大会そのものがなく、高専生が互いに英語表現力を磨き、競い合う機会すら持てずにいた。一方で、九州地区は既に四〇年以上、四国・中国・関東信越地区では二〇年以上という地区大会の実績が培われており、このままの状況が続けば、地区大会の実施地区と未実施地区との間に「地域間格差」が生じかねない、という懸念もあった。もう一つの限界は、弁論大会という形態にあった。決められた文章を暗唱する「暗唱の部」と発表者が自説を述べる「自由弁論の部」は、一定の意義はあったものの、「実践的な英語表現力」を磨くという点においては明らかに不十分であった。産業界からより実践的な英語力を強く求められている今、従来の形態のままではその声に応えられないのでは、という意見が出てきた。

全国大会開催に向けて

そのような中、平成十五年八月の全国高等

専門学校英語教育学会（略称COCET、以下「学会」）の研究大会において、ある教員から高専英語弁論大会の「全国大会」を開催しようという提言が出されたのを機に、筆者を含め前述四地区の有志代表五人が「全国高等専門学校英語弁論大会（仮称）調査・準備世話人会」（以下「世話人会」）を発足させた。ここから全国大会開催に向けての活動が始まったのである。

平成十六年六月にはこの世話人会が中心となり、COCET会員を対象に、全国大会開催についての教員の意識調査、および各地区・各高専の実態調査のためのアンケートを実施した。その結果、高専英語教員の約八三％が全国大会の開催に賛成していることや、既に地区大会を実施している前述四地区内では約六〇％の教員が「プレゼンテーション部門」の設置を希望していることなどが明らかになった。

この調査結果を踏まえ、世話人会は同年八月の学会総会で前述の意識調査の集計結果を報告した上で、今後は「①地区別英語弁論大

会を全地区で実施、②全国英語弁論大会の開催、③より実践的なプレゼンテーション能力の向上を目指した大会の実施」へと運動を展開していく、というアピール文を提唱し、ほぼ満場一致で採択された。

この採択を受け世話人会では、全国大会の早急な実現に向け、地区大会の未実施地区（北海道・東北・北陸・東海・近畿）からも新たに五人の有志を募り、合計一〇人体制で活動の場を拡げた。平成十八年度末には九州沖縄地区と中国地区の高専校長会に対し、「全国高等専門学校英語弁論大会（仮称）」の早期開催を要求する嘆願書を提出した。この嘆願書は総論としては賛同を得ることができ、九州沖縄地区の校長会から出された「推薦書」とともに高専機構に送られることとなった。しかし、全国の高専校長から成る組織である高等専門学校連合会（以下「連合会」）からは、高専機構任せのトップダウンでの開催は運営が困難であることや、大会の形態が従来の弁論形式を脱しておらず、実施に向けた具体的方策にも欠けていることなどが指摘された。そこで、平成十九年二月に学会の会長・副会長ら新執行部三人が急遽、世話人会に加わり、活動方針として以下の三点を新たに決定した。

- ① 高専生の大会という特徴を出すため、「弁論大会」ではなく「英語プレゼンテーションコンテスト」と称すること。
- ② 学会、すなわち高専の英語教員自身が、大会運営を担うこと。
- ③ 全国大会を高専の公的な教育活動として位置づけるため、連合会との共催で実施すること。

この方針に基づき、実行委員会（平成十九年四月に「世話人会」から正式に改称）で九州沖縄地区をモデルとして英語プレゼンテーションコンテストの「大会規約」と「大会実施要項」を作成し、高専機構本部を通じて連合会と学会との共催を前提とした同コンテストの開催を依頼した。その結果、平成十九年六月の連合会総会において実行委員会案が認められ、高専史上初の「全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト」の開催が承認されることとなった。

第一回大会は大分高専が主管校となり、実行委員長である筆者をはじめとする一三人の実行委員の手によって運営された。この全国大会開催を機に、それまで地区大会を行っていなかった近畿地区では、初めての地区大会実施が決定された。同様に地区大会を行っていなかった東海地区は、平成十七年度から定期開催されていた北陸大会に特別参加という形で参加し、これが東海北陸地区大会実施の足がかりとなった。

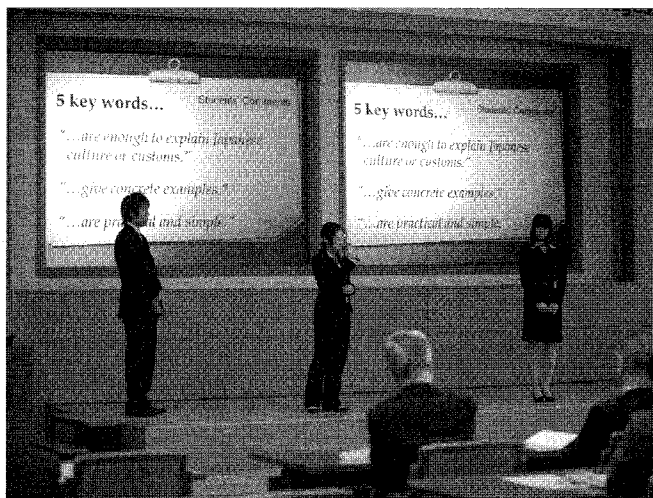
予選と本大会

本大会は「スピーチ部門」と「プレゼンテーション部門」から成り、スピーチ部門では全国八地区から各地区大会（予選）で上位入賞した二人×八＝一六人が全国大会出場を果たした。プレゼンテーション部門は、全国大会の出場枠一〇チーム（一チーム三人構成）に対し二二チームの応募があったため、ビデオ審査による予選を実施した。プレゼンテーション部門において三人一組のチーム制を導入した背景には、「高専生の英語表現力を飛躍的に向上させるには、一高専内で英語が使える

高専生を一気に増やしていく必要がある」という実行委員会の願が込められている。

「英語が使える高専生」を合言葉に、平成二十年一月に東京で開催された第一回大会には、学生、教員、高専機構関係者、一般見学者などを含め一五〇人余りが参加し、予選を勝ち抜いた全国の強者たちが、高専らしい「ものづくり」や「科学技術」に関して英語で堂々と発表を行った。「英語が弱い」と言われ続けてきた高専生ではあるが、このような機会を提供しさえすれば、彼らが本来持っている底力を十分に発揮させることができるのだと、認識を新たにすることができた。

この全国大会開催をきっかけとして、高専における実践的英語教育がより活性化され、高専生の更なる英語表現力向上へと繋がっていくよう願っている。



大会の様子（プレゼンテーション部門）